

〔書評〕

徳永光展著 『城山三郎』 『素直な戦士たち』 論

森野正弘

本書は、本学会会員である徳永光展氏の上梓された研究書である。表題にある通り、直木賞作家である城山三郎の小説『素直な戦士たち』（新潮社、一九七八年九月）に対する論文集となる。『素直な戦士たち』という作品が、果たして現代の文学シーンの中でどのような位置を占めるものかについて、恥ずかしながら私は把握できていない。ただ、この作品は発表の翌年にドラマ化されてもおり（NHKの土曜ドラマとして一九七九年一月八日から一九七九年一月二十九日にかけて放映）、ある種の社会的インパクトを持ったものとして受け取られたのであろうことは十分に推測される。また、そういったことは別に、そこに描かれた世界は私にとつて、自分の歩んできた昭和のある時代の雰囲気や、ややデフォルメしたかたちながらも映し撮ったものとなっており、ノスタルジーをそそられる作品として個人的に興味を覚えた。

本書の内容について触れる前に、まずはこの『素直な戦士たち』という作品の概要を示しておきたいと思う。背景となるのは高度経済成長期の日本。短大を卒業して、三年間ほど保母（保育士）を勤めた千枝という女性が、昭和三十五年（一九六〇）、二四歳の時に松沢秋雄という男性と見合いをする。秋雄は、さして有名でもない

私立大学の出身で、平凡なサラリーマンであったが、IQ（知能指数）が一五三であるという点で、千枝の関心を惹いた。実は千枝には、何にでもなれる自由を持った英才児の母になるという夢があり、そのような千枝にとつて高い知能指数を持つ秋雄の存在は、格好の結婚相手として映ったのである。以下、作品は千枝の主導によって結婚、受胎、胎教、出産、育児が展開する様子を描いてゆく。

昭和三七年（一九六二）に長男の英一郎が誕生し、翌年に次男の健児も生れるが、千枝が力を注ぐのは専ら英一郎に対してであり、健児については顧みることがない。幼児語の禁止を始めとして、徹底したエリート育成のためのメニューが英一郎の身に施され、その千枝の教育方針に一家は振り回されてゆく。最初に英才教育の成果が試されたのは、英一郎の国立T大学付属小学校入学試験の場であった。ここでは、偏狭な千枝の子育ての負の側面が露呈し、協調性を身につけていない英一郎に不合格の烙印が押されてしまうこととなる。英一郎は公立小学校に通うも、集団にコミットすることはなく、小学五年生の時に入ったR進学スクールが彼の主戦場となつてゆく。

受験勉強の甲斐があつて、英一郎は私立中学の名門Z中学に見事合格する。しかも、三〇〇人中四四位という好成绩での合格であつた。が、その翌年に弟の健児が、兄の跡を追うようにしてZ中学に入学してきたことにより、松沢家に不穏な空気が流れ始める。健児は英一郎とは異なり、千枝の英才教育をまったく受けずに生きてきた子であつた。それゆえ、英一郎にとつてばかりでなく、母の千枝にとつても、健児が優秀であることは容認されるものではなかつたのである。しかし、兄と弟の成績は次第に逆転の様相を呈するようになる。英一郎は高校一年生の一学期になると、弟の存在に対する心理的なプレッシャーから精神に異常を来し、ついには入院する事態となる。退院後、千枝は英一郎と健児を引き離すべく、近所に建設中のマンションを購入し、英一郎と二人で暮らす計画を立てる。一方、精神的に追い詰められた英一郎はその建設中のマンションに健児を呼び出し、抹殺することを計画する。英一郎は、入居予定の四階の部屋のベランダから弟を突き落とすが、不覚にも彼は弟と一緒に落ちてしまつたのであつた。

さて、以上が『素直な戦士たち』の概要であるが、それを分析する本書の構成は、「第一章 本研究の概要」、「第二章 秋雄・千枝の關係と英一郎の幼児期―計画育成の実相―」、「第三章 行き詰る英才教育―エリート集団における英一郎―」、「第四章 見捨てられる次男―健児の立場―」、「第五章 封じられる秋雄の声―夫婦間衝突回避の状況―」、「第六章 山積する疑問―秋雄の視点―」、「第七章 女性という存在とエリート養成―千枝の視点―」、「第八章 宗教にすぎる様相」、「第九章 批判する他者の存在―係長・尾石の眼差し―」、「第十章 『その日』以降の松沢家―敗れた夢―」、「第十

一章 英才教育が『ほんとうの自由人』を作るといふ発想」の全十章から成り、巻末に「城山三郎『素直な戦死たち』あらすじ」を載せる。第二章は英一郎の小学校入学までを扱い、第三章は英一郎の小学校入学以後の松沢家の動向を論じたもの。第四章は健児についての論。第五章と第六章は秋雄の視点から見た作中世界。第七章と第八章は千枝の人物造形についての論。第九章は秋雄の職場であるQ社の人々に映つた松沢家についての論。第十章は作品の後日談を想定した論述であり、第十一章は千枝の英才教育に対する論評となる。

徳永氏は「第一章 本研究の概要」の「第一節 問題の所在」で、「読者はこの物語を批判的に摂取しつつ、おのおのの子育てを實踐していくべきであるように思われる。なぜならば、作者は千枝が言う『ほんとうの自由人』（三三三頁）とは何であるのかを問にかけているに違いないからである」と述べている。本書の目的は、この「ほんとうの自由人」の内実を究明することにあると言えようか。そしてその解答は、「第十一章 英才教育が『ほんとうの自由人』を作るといふ発想」において提出されることになる。恐らくは次の条が、徳永氏の辿り着いた結論ということになるであろう。

思えば、才能の早期開発とは、様々な分野で言われていることではある。しかしながら、ある才能に特化して子供を育てるならば、他の才能は眠らせたまま成長させざるを得ないというのもまた真実なのではなからうか。眠らせたままの才能を子供が成人した後求めた場合、親はどのようにして子供に言い聞かせればよいのであろうか。R進学スクール、Z中学・高等学校、東大法学部という路線を歩んだからこそ、選択せざるを得ない

進路というものもまた存在するのではないか。そう考えた時、ほんとうの自由人という言葉が詭弁である事実に気づかされるのである。また、親が評価されたいという発想は子供を道具としてしか捉えていない点において、親の自己中心的思想の最たるものとも言えるのである。つまり、子供の幸せを極めて近視眼的にしか見ていないということなのである（一八二頁）

なるほど、親はより多くの人生が選択できる「自由」を獲得させるべく、子供に英才教育を施すが、勉強してエリート・コースの各階梯を辿っていくことは、かえってそのコースから外れることができなくなり、「不自由」な道を子供に歩ませることになるというわけである。子供が成人した時に様々な人生の可能性が開けるよう、親は子供の能力を最大限に開発するべきであるという千枝の考え方は、それ自体、誤謬を含んだものとも思えないが、徳永氏は、それが親の虚栄心を満たしたいがための、まやかしの論理であると看破する。千枝の言う「ほんとうの自由人」とは、「二七モノの自由人」にはかならず、彼女の思想は単なる親のエゴでしかないということ、作者は訴えているという見立てである。

本書では、このような見立てのもとに、登場人物たちの言動が繰り返し検証されていく。その検証方法は、本文の引用を積み重ねていくというものであるため、本書を読み進めることは、そのまま『素直な戦士たち』という作品をトレースすることにもつながっている。各章毎に、英一郎に視点を据え、健児に視点を据え、秋雄の視点から見たり、千枝に視点を据えたりしながら、多角的に作品が検証され、漸次その世界の異様さがあぶり出されていくという仕組みである。ただ、本書を読み進める者は、しばしば既視感に見舞わ

れてしまうかもしれない。これは、本文引用という検証方法の弊害であろう。本書では、ある登場人物なり、出来事なりが組上に載せられる場合に、常に同じ箇所本文がセットで引用される傾向にあり、そのため、章が変わっても、同じ調子の文章を読んでいる感覚に陥るのである。これは、肯定的に見れば、それだけ徳永氏による登場人物像や出来事の把握が確立しているということであろうが、一方で、せっかく際立つはずだった各章の特色が薄められてしまっているようにも思える。

本書に対して私の抱いた違和感をもう一つ指摘したい。それは、先行研究との関係である。「第一章 本研究の概要」の注（1）において、

橋本健二『格差』の戦後史―階級社会 日本の履歴書―（河出書房新社 二〇〇九年一〇月 一五三―一五四頁）が、この作品については「全体としては非現実的でありながらも、綿密な取材と英才教育のハウツー本にもとづいて書かれた個々のエピソードには、ぞつとするほどのリアリティがあり、大きな反響を呼んだ」との評価を下しているが、この作品に関する先行研究と呼び得るような作品論は書かれていない。（一七頁）

と述べて以降、本書では、教育学や社会学、心理学などの文献が注に掲げられることはあっても、文学研究について触れられることはない。これは、本書が文学研究としていかなる位置に据えられるものであるかを測ろうとした際に、その指標が失われていることを意味する。では、本書が教育学や社会学、心理学などの研究書かという点、それもまた違う。なぜなら、それらの文献が注で触れられる場合、「〇〇学では、〇〇とされている」という形式になっていて、

はしなくも本書がそれら「〇〇学」とは異なる領域の学位置することを表明しているからである。諸文献を引用する著者の博搜ぶりには瞠目すべきものがあるが、その多くが語釈に終始していて、研究の成果を継承したり、それを相対化したりする姿勢が見られず、もの足りなさを感じた。徳永氏の思考過程は実際にはそのようなものではなかったかもしれないが、文章として書かれた結果からは、そういった印象を覚えたということである。

いったい、《家族》や《学問》という制度は、いかなる問題系を手繰り寄せるものなのであろうか。例えば本書では、千枝の英才教育は「ほんとうの自由人」をもたらすものではなかったと批判しているが、では、作者が伝えたかった「ほんとうの自由人」とはどのようなものであったか。そもそも《学問》とは、その論理性や客観性によって自律的であることを保証されたものであるはず。例えば「2+3」という計算は、誰が解いても「5」であり、そこに、貧富の差や性別の関与する余地は無い。それゆえ人は、《学問》を身につけることで物事の判断基準を論理性や客観性に置くようになり、その結果、地縁（生れ）や血縁（家族）といった封建的社会制度から、自由になることができるのである。そう考えたとき、知能指数という血の論理から出発した千枝の、いかなる点に錯誤があったかが再確認されてこよう。千枝が教育ママとして偏執的な人物に造形されているというこの読み取りは、作品を理解するうえで重要な手続きであることに違いないが、そういった点を前提として、力点を置くべきは、彼女の道徳的な描かれ方を通してどのような社会制度が浮き彫りになり、批判されていくのかという問題ではなかっただろうか。あるいはまた、作者はなぜ、そういった社会

制度を批判するうえで、《愚兄と賢弟》という神話的な物語構造を作品の骨子に持ってきているのかという問題もある。そして、これらの問題系は、それこそ近代という、個人が共同体から切り離された時代に生みだされた文学の、ある意味《古典》的な主題ではなかったらうかと、つい思われるのである。

研究対象となる作品は決して任意に選ばれるものではない。この文章の冒頭でも述べたように、私にとって『素直な戦士たち』という作品は、その時代背景が自己の人格形成期とも重なっており、大変興味をそえられるものであった。私と同世代である著者の徳永氏もまた、この作品に何かしらの非任意な研究動機を認めたのである。果たしてそれがどのようなものであったのか。もう少し著者の主義主張を前面に押し出してほしかったという悩みも残るが、まずは、『素直な戦士たち』という作品に問題を見出し、その解明に取り組んだ徳永氏の開拓者精神に敬意を表したい。

(二〇一二年四月一〇日 双文社出版刊 二八〇頁

四〇〇〇円＋税)

(もりの・まどひろ)